第２回　誰もが主役　多様な協会へ

「誰もが主役　多様な協会へ」推進チーム

本連載では、「誰もが主役　多様な協会へ」というスローガンのもと、多くの会員に協会活動への参画の多様なあり方を提案したく、さまざまなかたちで協会活動に従事している方々にインタビューをして参ります。インタビュアーは「誰もが主役　多様な協会へ」推進チーム 高橋香代子理事・吉田尚樹氏です。

記念すべき１人目は、竹中佐江子理事です。それではどうぞ。

高橋

まずは、自己紹介をお願いします！

竹中

私は、大阪生まれ、大阪育ち。臨床６年目の時に訪問看護ステーションに転職しました。そこで、お子さんの在宅支援が足りていないことを実感しました。病院勤務時代は、時間をかけて通院してくるお子さんや親御さんの姿もみていましたので、生活の場で支援する療法士の必要性を感じるようになりました。

吉田

今は東京を拠点にお仕事をされていますよね。東京へはいつからですか？

竹中

14 年前に結婚を機に東京に来ました。東京で民間会社（現：株式会社リニエ R）の訪問看護ステーションの立ち上げにかかわり、2012 年より取締役として主に子ども分野の事業展開や、人財育成の体制づくりに携わってきました。今まで発達領域に進みたかったけれど機会がなかった人、未経験だけどチャレンジしたいという人が挫折しない仕組みや実践の場づくりを模索してきました。

高橋

私も今年度から理事になりましたが、それまでは理事がどんなお仕事をしているのか漠然としか知りませんでした。竹中理事から、理事の主な職務を読者の皆さんにお伝えいただけますか？

竹中

理事は、理事会に出席して、協会の活動方針や事業内容、組織やルールづくり等の重要事項について質問や意見を述べたり、提案をしたり、決議に参画したりすることが主な職務になりますね。

昨年開催された第４回日本 - 台湾作業療法ジョイントシンポジウムで講演する竹中理事

愛犬と一緒にセーリングを楽しむ竹中理事

吉田

理事の皆さんは理事会に出席するだけでなく、さらにさまざまなお仕事をされているようにみえます。

竹中

はい、広い意味で本会の理事の役割は「作業療法士が社会に対してどんなことができるのかを発信する」ことなんだと思います。社会課題やニーズをキャッチし、作業療法士がどう活躍することができるのかを考えていくこと、作業療法士のなかでだけではなく、もっと関連団体も含めた外の世界とつながっていくこと、協会の「顔」としての役割も重要です。

高橋

竹中理事はなぜ理事になろうと思ったのでしょうか？

竹中

臨床現場だけで働いていた当時は、私個人が動けばいいというふうに思っていたんです。でも、事業の立ち上げにかかわるなかで、私が動くのではなくて仕組みづくり等のマネジメントも必要だと感じ始めました。
また、私が医療機関から地域に出た頃は、子どもの訪問リハビリテーションをやっているところはほとんどなく、在宅や地域支援が重要であり、解決していくべき課題がたくさんあると感じていました。「地域の子どもを支援する作業療法士を増やしたい！」というミッションと課題解決のためにも何かしなくてはと思っていました。そんな思いが動機になっていますね。

吉田

理事としてだけでなく、ほかにも協会のお仕事をされていますよね？

はい、教育部の部長として、作業療法士の卒前卒後の教育にかかわる制度づくり等にも携わっています。そのなかでも、今は来年度からスタートする新しい生涯学修制度や次期指定規則改正に向けて検討班の皆様と一緒に準備を主に進めています。

竹中

高橋

本務やプライベートと協会のお仕事の両立については、どうされてますか？

仕事の割合としては、本務や協会理事関連業務も含めて９割ぐらい、プライベートは１割ぐらいでしょうか。「プライベートは１割」と聞くと少なく感じる方もいるかもしれませんが、私の頭のなかでは切り分けて考えられるものではなくて、すべてつながっているんです。
協会活動を継続するためには、家族がどう思うかという問題はあります。私には夫と愛犬がいるので、家族の理解と協力は不可欠です。家庭内では得意なところをやって苦手なところは夫に任せたりと役割分担をしながら、家庭内マネジメントを心掛けています。

竹中

吉田

多岐にわたるお仕事をポジティブに取り組んでいくためにも、プライベートの時間が重要ですね。「1割」のプライベートの時間はどのように過ごされているんですか？

プライベートでは、家族との定期的なコミュニケーションを大切にしています。夫とは大学時代のヨット部仲間なんです。なので、今も一緒に休日はヨットのレースに出たり、練習したりしてますね。家族と共有できる時間や楽しみがあるといいのかもしれません。

竹中

高橋

竹中理事にとって、理事としてのお仕事の面白さややりがいはどういったところにありますか？

自分が経験してきた領域と違う方々と一緒に制度や仕組みをつくり上げることですね。たとえば、理事１期目の時に、運転と地域移動支援実践者の制度創設に委員会の皆様や教育部と一緒にかかわった経験は貴重でした。
協会の理事をさせていただくことでみえる景色が変わるんです。個人の視点を超えて、地域や社会といった広い視点で課題をみつけることができるところに、理事であることのやりがいを感じています。
まだまだ未経験のことが多く、自分の考えの至らなさも日々感じています。ですが、達成できた時の満足感は、ほかではなかなか得られないものだと思っています。

竹中

吉田

クオータ制の導入について、竹中理事はどうお考えですか？

竹中

協会の会員構成は、とても多様なんですよね。今回はジェンダー・クオータ制になりましたが、女性のためだけに導入されるわけではないと思っています。子育てが女性に偏っているところがまだまだあるなかで、誰もが協会活動に参画する機会をもっと促進していくためにも、ジェンダー・クオータ制の導入には賛成です。

加えて、世代も重要だと私は思います。ジェンダーへの意識も世代により異なります。もっとさまざまな世代の理事や役員が意見を出し合い、協会の認識や価値観を変えながら、協会をつくり上げていくことが必要になってくるのではないでしょうか。

高橋

最後に会員の皆さんにメッセージを！

竹中

協会への参画は特別なものではありません。自分が作業療法士として感じてきた疑問や課題を解決するチャンスでもあります。人とのつながりを通して、新たな自分の可能性を広げることができるかもしれません！　できることから一緒に始めてみませんか？

高橋

吉田

ありがとうございました！

今回は、竹中佐江子理事から協会活動の内容や参画のあり方、工夫等についてお話していただきました。また今後、導入されるクオータ制についても多様な協会のあり方と絡めながらご意見をお聞きできました。ぜひ、皆様にとって多様な協会活動への参画の一歩として参考に、そしてクオータ制をそのきっかけにしていただければ幸いです。

次回も、「誰もが主役　多様な協会へ」推進チームの記事を楽しみにお待ちください。